

# ベクシル—2077日本鎖国—

2007(平成19)年8月18日鑑賞(梅田ピカデリー)

★★★



監督・脚本=曾利文彦/脚本=半田はるか/声の出演=黒木メイサ/谷原章介/菅生隆之/  
松雪泰子/朴璐美/櫻井孝宏/高橋研二/柿原徹也/森川智之/大塚明夫/斉藤次郎(松竹  
配給/2007年日本映画/109分)

……何ともショッキングなタイトルのこんな映画は、アイデアと構想力がすべて！そして、3Dライブアニメという最先端の映像が売り！日本が国際連合を脱退してまで鎖国したのはなぜ？アメリカの特殊部隊SWORDが日本に潜入してきたのはなぜ？そして、かつて東京と呼ばれた都市の今は……？ヒットするかどうかは不明だが、面白い問題提起であることは確か。お盆=終戦記念日が過ぎた今、国連重視主義の小沢民主党のお手並みに注目しながら、近未来の日本を考えてみるのも一興では……？

## まずは映画の大前提から

タイトルの『ベクシル』だけでは何の映画なのかサッパリわからないが、『2077日本鎖国』というサブタイトルを見てギョッとするはず。

今から70年先の近未来の日本が鎖国している。そりゃエライコッチャと思うのは日本人なら当然。まずはそこで興味を惹きつけられた私がこの映画を観ていると、冒頭スクリーン上には5度にわたって字幕が流れてくる。パンフレットには極小の字でそれが写っているので、この映画の大前提を理解するために、多少長くなるがそれを引用しておくのと次のとおりだ。

- ①21世紀初頭、世界的にロボット産業が急速な発展を続けていた。2050年頃、特に日本は技術面や生産面で他国を大きくリードし、家電から兵器まであらゆるロボットを製造し市場を独占していた。
- ②しかし、技術が人間の延命パーツや、アンドロイド(ヒト型ロボット)の実現に及ぶと国際情勢は一変した。原子力開発やバイオテクノロジーと同様に、国際連合によ

り厳格な国際協定が作られ規制が設けられることになった。

③日本は、この規制に最後まで抗議し抵抗したが、その決定が覆ることはなかった。これに不服とした日本は、国際連合脱退という厳しい道を選択し、『ハイテク鎖国』に突入した。

④2067年、日本はハイテクを駆使した『完全なる鎖国』を完成し、今年で10年を迎えようとしていた。その徹底した情報遮断政策により、秘密のバールが日本全土を覆っていた。

⑤もちろん、この10年間、本当の日本の姿を見た外国人は誰一人いない。

2007年7月29日の参議院選挙の結果、自民党の大敗、与党の過半数割れとなったが、民主党の小沢一郎代表は国連重視の路線を掲げている。

まあ、来るべき衆議院選挙で自民・民主のどちらが政権を握ることになっても、この国連重視の姿勢には大きな違いはなく、まちがってもかつて1933年の国際連盟からの脱退と同じような愚をくり返すことはありえないはず……？ ところが、ハイテク産業・ロボット産業の発展の中、世界で孤立した日本は2067年には国際連合を脱退することになるらしい……？

もちろんそんな映画の時代に私は生きていないが、息子や娘たちはひょっとして……？

## 3D ライブアニメとは……？ 私にはサッパリ……？

5月22日に観た『ファウンテン 永遠につづく愛』（07年）の映像の美しさは際立ったものだったが、これはCGの延長線のものらしい。ところが、6月1日に観た『ルネッサンス』（06年）は、実写とアニメーションの境界線を超越し、21世紀の映像をさらに過激に進化させる驚異の映像体験とのことで、白黒の劇画チックな映像が特徴。また、6月6日に観た『Genius Party』（07年）は、STUDIO4℃ がつくり出したクリエイティブな映像が売りモノの7話のオムニバス映画。

この映画のパンフレットでは、映像クリエイターの大口孝之氏が、ハリウッドのフル3 DCGアニメーションとの対比を中心として、日本独自のフル3 DCGアニメーションについてレビューしてくれている。これを読めばわかる人はわかるのだろうが、残念ながら私には2 Dの劇場アニメも3 DCGアニメもわからない。さらに、ハリウッドのフル3 DCGアニメーションも、日本独自のフル3 DCGアニメーションもサッ

パリ……？

また、「モーション・キャプチャーとは、俳優の動きをCGキャラクターのアクションに直接取り込む技術をいう」とのことだが、これについても色々メリット、デメリットがあるらしい。

さらに、「トゥーンシェーダー」についてもいろいろ書いてあるが、いくら読んでその内容はサッパリ……？

まあ、そんな技術的な話は横において、要はこんな映像が好きかどうかの問題。そして私は、『ルネッサンス』や『Genius Party』と同じようにこの『ベクシル』の映像にも何となく違和感が……？

## アイデアと構想をどのように評価……？

こんな近未来を描く映画は、2067年に鎖国した日本が10年後の2077年にどのようなになっているのかについて、いかにアツと驚くようなアイデアと構想を打ち出せるかが勝負。そんな目で見ると、そのアイデアと構想のポイントは、①大和重鋼が支配する日本とは？ ②ジャグの生態とその役割は？ ③レジスタンスたちの基地やそのメカは？ ④城壁内の街での暮らしは？ という4つ。

これらはそれぞれ面白いもの（突拍子もないもの？）だが、このアイデアと構想を面白いと思えるか、それともそんなバカなと思うかによって、この映画の評価は全くわかれるはず。8月4日に日本で公開されたマイケル・ベイ監督の『トランスフォーマー』（07年）は、全世界で大ヒットしているようだが、私はこの『トランスフォーマー』の売りと同じような、『ベクシル』で登場するロボットや大型ヘリ、バギー（車）、バイク、ファイタースーツなどには全く興味がない。そんなものは好きなように工夫し、そのオタク性を競えばいいもの。そして、それは単純に技術の問題……。

しかし、それ以外の他の3つは、かなり深刻な文明論がテーマ。したがって、以下この3つについて、私なりの文明論を……。

## 面白い構想 その1——「大和重鋼」とは……？

小泉構造改革は、中曽根内閣時代に唱えられた「民間活力の導入」をより徹底させたもので、すべての分野に競争の原理をより強く導入しようとしたもの。また、「官から民へ」というキャッチフレーズは、官の支配によって硬直化したニッポン国を民

間の自由な発想と競争によって活性化しようとした正当なもの。しかし、2077年のニッポン国を大和重鋼という一民間企業が牛耳っている姿を見ると、そんな「官から民へ」という発想にも少し疑問が……？

大和重鋼のトップ、すなわち CEO (Chief Executive Officer、最高経営責任者) がキサラギ (森川智之) だが、どうもこいつは頭が少しヘン……？ 今、日本国が崩壊し、生体反応を示す人間がごく数人しかいなくなっているのは、日本国の1億数千万人の国民すべてに予防接種ワクチンと称してケツタイな注射をしたため。これによって、人間は徐々に鉄で構成されるロボットになっていったわけだ (アンドロイド化)。そんな恐ろしい計画を実行した大和重鋼は、自らは後で述べるジャグからの攻撃を避けるため海上に巨大な人工島をつくり、そこですべてをコントロールしているという壮大な構想だ。

曾利文彦監督がはじめて使った日本独自のフル CG アニメーション最大の特徴は人間の表情のリアルさだが、この大和重鋼が支配する人工島の姿もそれなりに見事なもの。しかし、大きなお世話かもしれないが、「DAIWA」という固有名詞がこれほど悪辣な企業の名前として使われているこの映画が大ヒットすれば、現在大和 (DAIWA) の名前をもつ企業のマイナスイメージが広がるのでは……？

## 面白い構想 その2——ジャグの生態とは……？

パンフレットの解説をそのまま引用すると、「不完全なアンドロイド化によって荒地をさまよう存在となってしまった、亡霊のような人間のなれの果てであるジャグは、周りにある金属をすべて飲み込んで知能を持たない巨大な生物のようにふるまう。日本全土では1000体近くが存在する。強く金属を求める習性があり、また、水を嫌う。海水には特に弱く、海中ではその機能を停止してしまう」とのこと。またプロダクションノートによると、このジャグをどんなイメージで映像化するかが大問題となり、「ひたすらジャグを作り続けた男がいた」とのこと。

こんな解説を読めば、鉄を食いあさるためにスクリーン上いっぱい広がるジャグの姿にも親近感が……？

## 面白い構想 その3——城壁の街とは……？

ほとんどアンドロイド化しながら、なお人間の姿をした人たちが東京のまちにたく

さん暮しているが、これはちょうど終戦直後のバラック生活のようなイメージ。彼らが生体反応を示さないのは、そのほとんどが鉄でできているため。したがって、食事をとる必要もないのだが、昔の人間時代の習性を懐かしむ彼らは、今も時々物を食べたりしているが、そんな姿を見ているとひどく哀れな気持ちになってくるのは当然……。また、彼らがジャグの攻撃にさらされないのは、大和重鋼が建設した巨大な城壁によって守られているため。そこで、なぜ大和重鋼はそんな投資をしたのかという疑問が湧くわけだが、それはこの人間（アンドロイド）たちを実験材料として飼っておくため、というからビックリ。

そんな状況下におかれている城壁の街での人間（アンドロイド）たちは、大和重鋼にひたすら服従するイタクラ議長（斉藤次郎）派と、最後まで人間としての誇りを失わず、あくまで大和重鋼と対決しようとする女戦士マリア（松雪泰子）をリーダーとするレジスタンス派に分かれていたが……。

### 3人のキャラがストーリーの決め手！

面白いアイデアと構想は以上のとおりだが、他方ストーリーを牽引するのは3人の主人公たち。すなわち、アメリカ海軍の対外諜報を担当する特殊部隊SWORDの女性兵士であるベクシル（黒木メイサ）と、鎖国された日本への潜入という特殊ミッションを遂行するSWORDの隊長レオン（谷原章介）、そしてもう1人レジスタンスの女兵士マリアの3人。レオンはベクシルの上司だが、現在2人は恋仲に……。ところが実は、今は遠く離れているマリアが昔レオンの恋人だったというのが、ちょっとした三角関係（？）の面白さ……。

そんな恋模様も少しだけ含ませているが、この映画のテーマはもっと深刻。そして、日本独自のフルCGアニメーションが作り出すこの3人の主人公の表情の豊かさが、この映画のポイント。

さらに、曾利監督はそれを強調するべく、ベクシルのキャラをえらく人間的で感情豊かな女兵士と設定した。そのため、70年後のアンドロイド化した日本国の中において、ベクシルが放つ言葉の数々は、かなりアナログ的。しかし、それがかえって新鮮……？

## 私の不満 その1——なぜ、SWORDは日本へ潜入するの……？

前述したように、この映画の構想は結構面白いものだが、私にはこの映画についていくつかの不满がある。第1に、根本的な構想上の不满は、なぜSWORDが大きな危険を犯してまで日本に潜入する特殊ミッションを立案したのか、がいまひとつ見えてこないこと。

かつて、国際連盟を脱退した大日本帝国は、その後中国（支那）の東北地方（満州）への進出を続けたため、中国をはじめイギリス、アメリカ、ソ連、オランダ等の列強がこれを危険視したのはよくわかる。しかし、今般国際連合を脱退した日本は、鎖国しているだけで、世界の各国に対して何か悪いことをしているわけではないから、アメリカが日本に介入する理由は何もないわけだ。かつてのベトナム戦争やアフガン戦争そしてイラク戦争について、アメリカは「世界の憲兵」として果たすべき役割を果たしたものと位置づけているが、鎖国状態の日本にアメリカのSWORDが潜入する動機と目的は一体ナニ……？ そこらあたりの構想も、しっかりと理屈づけしてほしかったが……。

## 私の不満 その2——レジスタンスたちの決起の目的は……？

レジスタンスの女戦士マリアの側近であるリョウ（櫻井孝宏）とマリアと一緒に暮らす少年タカシ（朴璐美）は、日本への潜入に成功しながら傷ついたベクスルを、大和重鋼の日本総務局長であるサイトウ（大塚明夫）たちの捜索から助ける役割を。他方、レジスタンスには、「ジャグ狩り」を楽しむ豪放磊落なサガ（高橋研二）や足が不自由ながらメカの才能は抜群のタロウ（柿原徹也）などさまざまな人材がいた。

彼らが目指すのは、人工島に突入して大和重鋼をやっつけてしまうことだが、さてその方策は……？ その構想も、この壮大な物語を面白くする大切な要素だが、実は私にはその点が不满。さて、レジスタンスたちは議長のイタクラとのどんな協議を経て、大和重鋼に対してどんな決起を……？ そして、その結末は……？

2007(平成19)年8月21日記